

存在論的穴について

小笠原 晋也

<http://www.lacantokyo.org>

「存在論的な穴」 le trou ontologique は、「穴」ないし「切れめ」そのものと定義される限りでの徴示素 a のことである。

Lacan による a の規定は多様であり(『ハイデガーとラカン』第一章, 第二章を参照), Lacan のテキストにおいて a が論ぜられているときはその都度, 多様な a の概念のうちいずれの意味における a が問題にされているのか, 注意深く識別しなければならない。

1960 年前後の Lacan のテキストには le symbolique と signifiant a を「切れめ」や「穴」と規定する箇所が幾つか見出される。

徴象 le symbolique を「穴」と規定することは, 1974-75 年の Séminaire R.S.I. において改めて強調される。

そこにおける定義によれば:

l'imaginaire \equiv la consistance 影象 \equiv 定存

le symbolique \equiv le trou 徴象 \equiv 穴

le réel \equiv l'ex-sistence 実在 \equiv 解脱実存

「定存」 consistance は, 影像 image が有する一種の「確かさ」, 「確固たるものであること」である。画像処理に関する IT が非常に発展した今, あたかもまさに image の明証性, 確固性こそがもっとも現実的なものであるかのごとき錯覚が蔓延している。

「穴」は、ex-sistence という Ab-grund [深淵, 根拠ならざる根拠, Seyn, Sein, 存在]のエッジを成すことによって ex-sistence を徴示する [signifier] ものとしての純粹徴示素 signifiant pur a そのものである。

「解脱実存」 ex-sistence は、自己秘匿における存在 φ の真理である。

ところで Lacan は *Écrits* p.818 において学素 $S(A)$ を「他 A のなかの欠如の徴示素」 [signifiant d'un manque dans l'Autre] と定義している。つまり、 A は欠如であり、 $S(A)$ はその徴示素 signifiant である。Saussure の学素 $\frac{S}{s}$ に代入すれば：

$$\frac{S(A)}{A}$$

徴示素の宝庫としての他 A の場処のなかの欠如 A は、「常に欠けている徴示素」としての phallus が成す欠如、すなわち、そのものとしては書かれ得ない性関係の公式としての φ である：

$$A \equiv \varphi$$

穴そのものである純粹徴示素としての a は、 $S(A)$ と等価である：

$$S(A) \equiv a$$

つまり、 a が純粹徴示素であるとき：

$$\frac{S(A)}{A} \equiv \frac{a}{\varphi}$$

「存在論的穴」は、徴象を穴と定義する際の「穴」であり、それは、 $S(A)$ としての純粹徴示素 a のことである。